

資治通鑑 第 217 卷

【唐紀三十三】 起闕逢敦牂，盡柔兆涸灘四月，凡二年有奇。

■唐、**突厥**突厥、統国訳漢文大成 経子史部 第 12 卷 251p

玄宗至道大聖大明孝皇帝下之下天寶十三載（甲午，754年）（天寶三年から載）

【安祿山の入朝と逃亡】

■**【安祿山の入朝で帝は益々信じる】**春，正月，己亥(35)，安祿山は入朝す。是の時楊國忠は、「祿山は必ず反す」

言い、且つ曰く、

「陛下は試しに之を召すべし、必ず來たらず。」

上は之を召さしめ、祿山は命を聞きて即ち至る。庚子(36)，上に華清宮に於いて見え、泣いて曰く、

「臣は本は胡人なり、陛下の寵擢此くに至り、國忠の疾む所と為る、臣が死すること日無し矣！」

上は之を憐み、賞賜は巨萬、是に由り益々祿山を親信し、國忠之言は入る能わず矣。太子も亦た祿山が必ず反すと知り、上に言い、上は聽かず。

■甲辰(49)，太清宮は奏す、

「學士(崇玄館學士)の李琪は玄元皇帝が紫雲に乗るを見る、告げるに國祚の延昌なるを以てす。」

■**【安祿山に位を加える】**唐初，詔敕は皆な中書、門下の官の文有る者が之を為る。乾封以後，始めて文士の元萬頃、(12-252p)范履冰等を召し諸々の文辭を草せしめ、常に北門に於いて進止を候い、時の人は之を「北門學士」と謂う。中宗之世，上官昭容は其の事を専らとす。上は即位し，始めて翰林院を置き，密に禁廷に邇し，文章之士を延き，下は僧、道、書、畫、琴、棋、數術之工に至るまで皆な之を處く，之を「待詔」と謂う。刑部尚書の張均及の弟の太常卿の[土自]は皆な翰林院供奉たり。上は安祿山に同平章事を加えんと欲し，已に張[土自]をして草制せ令む。楊國忠は諫めて曰く、

「祿山は軍功有りと雖も、目に書を知らず、豈に宰相と為す可けんや！制書若し下れば、恐らくは四夷は唐を輕んじるべし。」

上は乃ち止む。乙巳(41)，祿山に左僕射を加え，一子に三品、一子に四品の官を賜わる。

■丙午(42)，上は宮に還る。

■**【安祿山は馬を増強】**安祿山は閒廐、群牧を兼ね領せんを求める。庚申(56)，祿山を以て閒廐、隴右群牧等使と為す。祿山は又た總監を兼ねんことを求める。壬戌(58)，總監(郡牧總監なり。唐に四十八監あり、以て馬を牧す。或るは曰く、此の總監は即ち苑總監なりと)の事を兼ね知す。祿山は奏し御史中丞の吉溫を以て武部(兵部)侍郎と為し、閒廐副(遍×)使に充て、楊國忠は是に由り溫を惡む。祿山は密に親信を遣わして健馬の戦いに堪える者數千匹を選び、別に之を飼わしむ。

■**【先祖に尊号を上る】**二月，壬申(8)，上は太清宮に朝獻し，聖祖に尊號を上りて大聖祖高上大道金闕玄元大皇太帝と曰う。癸酉(9)，太廟に享し，高祖に諡を上りて神堯大聖光孝皇帝と曰い，太宗に諡して文武大聖大廣孝皇帝と曰い，高宗に諡して天皇大聖大弘孝皇帝と曰く，中宗に諡して孝和大聖大昭孝皇帝と曰い，睿宗に諡して玄真大聖大興孝皇帝と曰い，漢家の諸帝が皆な孝を諡とするを以てが故也。甲戌(10)，群臣は尊號を上りて開元天地大寶聖文神武證道孝德皇帝と曰う。天下に赦す。

■丁丑(13)，楊國忠は位を司空に進められる。甲申(20)，軒に臨みて冊命す。

■[安祿山は部下に賞を加える]己丑(25)、安祿山は奏す、

「臣の所部の將士は奚、契丹、九姓、同羅等を討ち、勳效は甚だ多し、乞う常格に拘わらず、資を超え賞を加え、仍ほ告身を好寫し臣の軍に付して之を授けしめよ。」

是に於いて將軍に除する者は五百餘人、中郎將たる者は二千餘人。祿山は反せんと欲し、故に先ず此を以て衆心を収める也。

■[安祿山は晝夜兼行して范陽に帰還]三月、丁酉(33)朔、祿山は辭して范陽に歸る。上は御衣を解いて以て之に賜い、祿山は之を受けて驚喜す。楊國忠が奏して之を留めるを恐れ、疾驅して關を出る。船に乗りて河に沿い而して下り、船夫をして繩板を執り岸側に立て(凡そ船を挽くの夫は板の長さ二尺許なるを用い、斜めに船前に搭し、一端は肩に至り、一端は脇に至り、繩をもって板の両端を貫き、以て船絆に接して之を挽く)、十五里ごとに一たび更ら令め、晝夜兼行し、日に數百里、郡縣を過ぎて船を下らず。是より祿山反すと言う者有れば、上は皆な縛して之を送る。是に由り人は皆な其の將に反せんとするを知り、敢えて言う者無し。

■[高力士は安祿山を送る]祿山之長安を發する也、上は高力士をして之を長樂坡(産坡、長安城の東)に餞せ令め、及ち還り、上は問う、

「祿山意を慰める乎？」

對えて曰く、

「其の意を觀るに怏怏として、必ず命じて相と為さんと欲し而して中止するを知るが故也。」

上は以て國忠に告げ、曰く、(12-253p)

「此の議他人は知らず、必ず張[土自]兄弟之を告げん也。」

上は怒り、張均を貶して建安(郡、隋には泉州、唐は閩州と曰く、別に泉州を置く。帝は閩州を改めて福州長樂郡と為し、建州を以て建安郡と為す)太守と為し、[土自]を盧溪(辰州)司馬と為し、[土自]の弟の給事中的塨を宜春司馬と為す。

■[哥舒翰も部將に論功]哥舒翰も亦た其の部將の為に論功し、敕して隴右十將(中世以来軍中の將領の職名)、特進(唐の制で文散階正二品)、火拔州(突厥の別部、開元中に火拔州を置く)都督、燕山郡王の火拔歸仁を以て驃騎大將軍(武散階從二品)と為し、河源軍使の王思禮に特進を加え、臨洮太守の成如璆、討擊副使の范陽の魯炅、皋蘭府都督(貞觀中に鉄勒來降し、渾部を以て置く)の渾惟明に並びて雲麾將軍(武散階從三品)を加え、隴右討擊副使の郭英乂を左羽林將軍と為す。英乂は、知運之子也。翰も又た奏して嚴挺之の子の武を節度判官と為し、河東(蒲州)の呂誼を度支判官(唐の制では邊郡に土度使あり、以て軍資糧仗の用を計る。其の屬に判官・巡官あり)と為し、前封丘(漢晋以来陳留に屬す、唐には汴州に屬す)尉の高適を掌書記と為し、安邑(蒲州に屬す)の曲環を別將と為す。

■[阿布思を斬る]程千里は阿布思(鉄勒、李猷忠)を執り、闕下に獻じ、之を斬る。甲子(0)、千里を以て金吾大將軍と為し、封常清を以て北庭都護、伊西節度使に權たらしむ。

■夏、四月、癸巳(29)、安祿山は奏して奚を撃ちて之を破り、其の王の李日越を虜とす。

■六月、乙丑(1)朔、日之を食する有り、鉤の如く盡きず。(部分日食)

■南詔[雲南の戦役、また大敗を隠す]侍御史、劍南(俞南×)留後(楊國忠は劍南節度使)の李宓は兵七萬を將いて南詔を撃つ。閣羅鳳は之を誘いて深く入らしめ、太和城(新唐書には大和城に作る。夷語、山陂陀を和と為す。ゆえに大和と謂う。閣羅鳳の居る所)に至り、壁を閉じて戦わず。宓の糧は盡き、士卒は瘴疫に罹り及び饑死するは什に七八、乃ち引いて還る。蠻は之を追撃し、宓は擒とせられ、全軍は皆な没す。楊國忠は其の敗を隠し、更に捷を以て聞し、益々中國の兵を發して之を討ち、前後死者は二十萬人に幾し(單于仲通の敗死者を含めて)、敢えて言う者無し。上は嘗て高力士に謂って曰し

「朕は今老す矣、朝事は之を宰相に付し、邊事は之を諸將に付し、夫れ復た何をか憂えん！」

力士は對えて曰く、

「臣は聞く雲南は數々師を喪い、又た邊將は兵を擁してただ盛んなり、陛下は將に何を以て之を制するや！臣は恐れる一旦禍い發すれば、復た救う可からず、何ぞ憂い無きを謂う也！」

上は曰く、(胡三省曰く、高力士の言は明皇豈に其の心に動く所無からんや。禍機將に發せんすれども、之を奈何ともす可き無しに付し、其の身の見る及ばざるを僥倖するのみと)

「卿は言う勿れ、朕は徐に之を思う。」

■秋、七月、癸丑(49)、哥舒翰は奏す、

「開く所の九曲之地に於いて洮陽、澆河二郡(皆洮廓二州の西南に置く。廓州は本は澆河郡。天寶岸根にに名を寧塞郡と更む)及び神策軍を置くべし」

と、臨洮太守の成如璆を以て洮陽太守を兼ね、神策軍使(洮州の西八十里磨擦州に置く)に充てる。

【宰相・楊国忠任せで危機へ】

■[楊國忠は吉温を敬遠]楊國忠は陳希烈を忌み、希烈は累表して位を辭す。上は武部侍郎の吉温を以て之に代之わらしめんと欲す、(12-254p)國忠は温が安祿山に附くと以い、奏して不可と云う。文部侍郎の韋見素が和雅にして制し易きを以て、之を薦す。八月、丙戌(22)、希烈を以て太子の太師と為し、政事を罷む。見素を以て武部尚書、同平章事と為す。

■[宰相任せの失敗]去歲より水旱は相繼ぎ、關中は大いに饑える。楊國忠は京兆尹の李峴が己に附かざるを惡み、災沴を以て咎を峴に歸し、九月、長沙(潭州)太守に貶す。峴、禕(信安王禕は開元の初めに軍功を以て上に寵あり)之子也。上は雨が稼を傷うを憂え、國忠は禾之善き者を取りて之に獻ず、曰く、

「雨雖多きと雖も、稼を害せざる也。」

上は以て然りと為す。扶風(岐州)太守の房瑄は所部の水災を言い、國忠は御史をして之を推(推安)せ使む。是の歲、天下は敢えて災を言う者無し。高力士は側に侍し、上は曰く、

「淫雨(三日以上の雨)は已まず、卿は言を盡くす可し。」

對えて曰く

「陛下が權を以て宰相に假するより、賞罰は章無く、陰陽は度を失う、臣は何ぞ敢えて言わん！」

上は默然たり。

■冬、十月、乙酉(21)、上は華清宮に幸す。

■十一月、己未(55)、内侍監(唐の制では官官は三品に過ぎるを得ず、内侍四人を置く、從四品上、中官の貴、此れに極まる。帝に至りて始めて其の制を廢る。楊思勗は軍功を以て、高力士は恩寵を以て皆大乘軍に拜し、階は從一品に至れども、猶ほ勳官なり。今内侍監を置き、正三品なるは職事官なり)二員、正三品を置く。

■[吉温をめぐる対立顕在化]河東太守兼本道採訪使の韋陟は、斌之兄也、文雅にして盛名有り、楊國忠は其の入りて相となるを恐れ、人をして陟の贓汚を告げ使め、事は、御史に下して按問せしむ。陟は中丞の吉温に賂いし、救いを安祿山に求め使む、復た國忠あはの發く所と為る。閏月、壬寅(38)、陟を桂嶺(漢の臨賀健の地。隋は桂嶺県を置く。唐は賀州に属す)の尉に、温を澧陽長史に貶す。安祿山は温の為に冤を訟え、且つ國忠の讒疾を言う。上は兩つながら問う所無し。

■戊午(54)、上は宮に還る。

■[5288万人]是の歲、戸部は奏す、

「天下の郡は三百二十一，縣は千五百三十八，郷は萬六千八百二十九，戸は九百六萬九千一百五十四，口は五千二百八十八萬四百八十八なり。」

玄宗至道大聖大明孝皇帝下之下天寶十四歲（乙未，755年）

■吐蕃春，正月，蘇昆王(吐蕃の疆部)の子の悉諾邏は吐蕃を去りて來降す。

■[玄宗は安祿山を信じたがる]二月，辛亥(47)，安祿山は副將の何千年をして入りて奏せ使む，「請う、蕃將三十二人を以て漢將に代らしめん」

と，上は命じて立ちどころに進晝(中書に命じて發日勅を為らしめ、進みて御晝を請いて之を行うなり。唐六典に、中書は王言を掌る、其の制七有り、其の四を發日勅と曰う。正に御晝發日勅を謂うなり。官員を増減し、州県を廢置し、官爵を序免し、六品以下の官爵を授けるには之を用いる)し，告身を給せしむ。韋見素は楊國忠に謂って曰く、

「祿山は久しく異志有り，今又た此の請い有り，其の反するは明らかなり矣。明くる日見素は當に極言す。上は未だ允さざれば，公は其れ之に繼げ。」

國忠は許諾す。壬子(48)，國忠、見素は入りて見え，上は迎えて謂って曰く、

「卿等は祿山を疑う之意有る邪？」(12-255p)

見素は因りて極言す、

「祿山が反すること已に跡有り，請う所許す可からず」

と，上は悦ばず，國忠は逡巡して敢えて言わず，上は竟に祿山之請いに従う。他日，國忠、見素は上に言つて曰く、

「臣は策有り坐ながら祿山之謀を消す可し。今若し祿山を平章事に除し，召して闕に詣り，賈循を以て范陽節度使と為し，呂知誨を平盧節度使と為し，楊光翹を河東節度使と為せば，則ち勢いは自ら分れん矣。」

上は之に従う。已に制を草す，上は留めて發せず，更に中使の輔璆琳を遣わして珍果を以て祿山に賜わり，潜に其の變を察せしむ。璆琳は祿山の厚き賂を受け，還り，盛んに言う、

「祿山は忠を竭くして國に奉じ，二心有る無し。」

上は國忠等に謂って曰く、

「祿山は，朕心を推して之を待つ，必ず異志無し。東北の二虜は，其の鎮遏に藉る。朕は自ら之を保し，卿等は憂うる勿れ也！」

事は遂に寝ねる。循は，華原の人也，時に節度副使と為る。

■隴右、河西節度使の哥舒翰は入朝し，道に風疾を得，遂に京師に留まり，家居して出です。

■三月，辛巳(17)，給事中の裴士淹に命じて河北を宣慰せしむ。

■夏，四月，安祿山は奏す、

「奚、契丹を破れり。」

■癸巳(29)，蘇昆王の子の悉諾邏を以て懷義王と為し，姓名の李忠信を賜わる。

■[玄宗は漸く安祿山を疑う]安祿山は歸りて范陽に至り，朝廷が使者を遣わして至る毎に，皆な疾と稱して出で迎えず，盛んに武備を陳べ，然る後に之を見る。裴士淹は范陽に至り，二十餘日乃ち見るを得，復た人臣の禮無し。楊國忠は日夜祿山の反狀を求め，京兆尹をして其の第を圍ませしめ，祿山の客の李超等を捕え，御史台の獄に送り，潜に之を殺す。祿山の子の慶宗は宗女の榮義郡主に尚し，供奉して京師に在

り(太僕卿となりて供奉官の班に随いて見えるを得る)、密に**祿山**に報じ、**祿山**は愈々懼れる。六月、上は其の子の婚を成すを以て、手詔して**祿山**を召し禮を觀しめ、**祿山**は疾と辭して至らず。秋、七月、**祿山**は表して馬三千匹を獻じ、匹毎に控夫二人を執り(以て京師を襲わんとすか)、蕃將二十二人を遣わして部送せしめんとす。河南尹の**達奚珣**は變有るを疑い、奏して請う、

「**祿山**を諭すに、車馬を進めるは宜しく冬に至るを俟つべし、官は自ら夫を給し、本軍を煩わす無からんと以てすべし。」

是に於いて上は稍^{ようやく}寤り、始めて**祿山**を疑う之意有り。會々**輔瑊**が賂を受ける事亦た洩れ、上は托すに他事を以てし之を撲殺す。上は中使の**馮神威**を遣わして手詔を繼して**祿山**を諭すこと、**珣**の策の如し。且つ曰く、

「朕は新たに卿の為に一湯(専用の温泉場)を作り、十月華清宮に於いて卿を待たん。」

神威は范陽に至りて旨を宣し、**祿山**は床に踞して微しく起ち、亦た拜さず、曰く、

「聖人(皇帝)は安隱なりや。」(隱は穩に通じる)

又た曰く、

「馬は獻せざるも亦た可なり、十月灼然として京師に詣らん。」

即ち左右をして**神威**を引いて館舎に置か令め、復た見ず。(12-256p)數日にして、遣り還し、亦た表無し。

神威は還り、上を見、泣いて曰く、

「臣は幾んど大家を見るを得ず！」

■八月、辛卯(27)、今載百姓の租庸を免ず。

■冬、十月、庚寅(26)、上は華清宮に幸す。

【安祿山挙兵】

■安祿山は范陽に反す、二十万と号す安祿山は三道に専制し、陰に異志を蓄え、殆んど將に十年、上が之を待つこと厚きを以て、上の晏駕を俟ち然る後に亂を作らんと欲す。會々**楊國忠**は**祿山**と相い悦ばず、屢々、

「**祿山**は且に反せんとす」

と言う、上は聽さず。**國忠**は數々事を以て之を激し、其の速に反して以て信を上にと欲す。**祿山**は是に由りて決意して遽に反し、獨り孔目官、太僕の**丞巖**、掌書記、屯田員外郎の**高尚**、將軍の**阿史那承慶**と密に謀り、自餘の將佐は皆な之を知る莫し、但だ其の八月より以來、屢々士卒を、馬に秣かい兵を厲ぐを怪しみ而して已む。會々奏事官有り京師より還る、**祿山**は詐りて敕書を為り、悉く諸將を召して之を示して曰く、

「密旨有り、**祿山**をして兵を將いて入朝して**楊國忠**を討た令む、諸君は宜しく即ち從軍すべし。」

衆は愕然として相い顧み、敢えて異言莫し。十一月、甲子(0)、**祿山**は所部の兵及び同羅、奚、契丹、室韋の凡そ十五萬衆を發し、二十萬と號し、范陽(現・北京市朝陽区)に反す。范陽節度副使の**賈循**に命じて范陽を守らしめ、平盧節度副使の**呂知誨**に平盧(現・遼寧省朝陽県)を守らしめ、別將の**高秀巖**に大同(現・山西省大同)を守らしむ。諸將は皆な兵を引いて夜發す。

■安祿山軍の南下詰朝、**祿山**は薊城(現・北京市大興区)の南に出で、大いに閱して衆に誓い、以て**楊國忠**を討つを名と為し、軍中に榜して曰く、

「異議して軍人を扇動する者有れば、斬は三族に及ぶ！」

是に於いて兵を引いて而して南す。祿山は鐵輿に乗り、歩騎精銳は、煙塵千里、鼓噪して地を震わす。時に海内は久しく承平し、百姓は累世兵革を識らず、猝に范陽の兵起るを聞く、遠近は震駭す。河北は皆な祿山の統内なり(河北道採訪使を兼ねる)、過ぎる所の州縣は、風を望んで瓦解す。守令或は開門して出で迎え、或は城を棄てて竄匿し、或は擒戮する所と為り、敢えて之を拒ぐ者無し。祿山は先ず將軍の何千年、高邈を遣わして奚騎二千(+×) 將いて、聲言す、

「射生手を獻ず」

と、驛に乗りて太原(現・山西省太原市晉源区)に詣る。乙丑(1)、北京副留守の楊光翹は出で迎え、因りて之を劫して以て去る。太原は具に其の狀を言う。東受降城も亦た祿山の反すを奏す。上は猶ほ以為らく祿山を惡む者は詐りて之を為すと、未だ之を信じざる也。

■【楊國忠は得色有り】庚午(6)、上は祿山が定めて反すと聞き、乃ち宰相を召して之を謀る。楊國忠は揚揚として得色有り、曰く、

「今反する者は獨り祿山耳、將士は皆な欲せざる也。旬日を過ぎず、必ず首を傳え行在に詣らん。」

上は以て然りと為し、大臣は相顧みて色を失う。上は特進の畢思琛を遣わして東京に詣らしめ、金吾將軍の程千里を河東に詣らしめ、各々數萬人を簡募し、便に隨いて團結して以て之を拒ましむ。辛未(7)、安西節度使の封常清は入朝し、上は問うに賊を討つの方略を以てし、常清は大言して曰く、

「今太平は積むこと久しく、故に人は風を望んで賊を憚る。(12-257p)然れども事に逆順有り、勢いは奇變有り、臣請う馬を走らせて東京に詣り、府庫を開き、驍勇を募り、馬槓を挑りて河を渡り、日を計りて逆胡之首を取り闕下に獻じん！」

上は悦ぶ。壬申(8)、常清を以て范陽、平盧節度使と為す。常清は即日驛に乗り東京に詣りて兵を募り、旬日、六萬人を得る。乃ち河陽の橋を斷ち、守禦之備えを為す。

■【何千年等は楊光翹を執る】甲戌(10)、祿山は博陵(本は定州高陽郡、天寶元年に郡名を更める、現・河北省保定市蠡縣)の南に至り、何千年等は楊光翹を執り祿山を見、光翹を責めるに楊國忠に附くを以てし、之を斬って以て徇う。祿山は其の將の安忠志をして精兵を將いて土門(現・河北省石家莊市白鹿泉白鹿泉鄉東土門村)に軍せ使む、忠志は、奚人なりて、祿山は養いて假子と為す。又た張獻誠を以て博陵太守を攝せしむ、獻誠は、守珪(安祿山を引き立てた)之子也。

【唐王朝側の討伐軍】

■【顏杲卿は密かに安祿山を討たんとす】祿山は蒿城(現・石家莊市藁城区)に至り、常山(本は恒州恒山軍。天寶元年に改名、現・石家莊市正定県)太守の顏杲卿の力は拒む能わず、長史の袁履謙と往きて之を迎える。祿山は輒ち杲卿に金紫を賜わり、其の子弟を質とし、仍ち常山を守ら使む。又た其の將の李欽湊をして兵數千人を將いて井陘口を守ら使め、以て西來の諸軍(河東路の兵)に備える。杲卿は歸り、途中其の衣を指して履謙に謂って曰く

「何為れぞ此を著けん？」

履謙は其の意を悟り、乃ち陰に杲卿と兵を起こして祿山を討つを謀る。杲卿は、思魯(之推の子、顔古の父)之玄孫也。

■【安慶宗を斬る】丙子(12)、上は宮に還る。太僕卿の安慶宗を斬り、榮義郡主に自盡を賜わる。朔方節度使の安思順を以て戸部尚書と為し、思順の弟の元貞を太僕卿と為す。朔方右廂兵馬使、九原(豊州)太守の郭子儀を以て朔方節度使と為し、右羽林大將軍の王承業を太原尹(北軍と為す、故に尹を置く)と為す。河南節度

使を置き、陳留(汴州)等十三郡を領し、衛尉卿の猗氏の張介然を以て之と為す。程千里を以て潞州長史と為す。諸郡の賊沖に當たる者に、始めて防禦使を置く。丁丑(13)、榮王の琬を以て元帥と為し、右金吾大將軍の高仙芝を之が副とし、諸軍を統べて東征せしむ。内府の錢帛を、京師に出し兵十一萬を募り、號して天武軍と曰い、旬日而して集まる、皆な市井の子弟也。

■[東征軍の編成]十二月、丙戌(22)、高仙芝は飛騎、擴騎及び新たな募兵、邊兵の京師に在る者合わせて五萬人を將い、長安を發す。上は宦者の監門將軍の邊令誠を遣わして其の軍を監し、陝に屯せしむ。

■[安祿山は黄河を渡る]丁亥(23)、安祿山は靈昌(靈昌津、滑州東郡、天寶元年に改名、現・鶴壁市、黄河故道の北岸)より渡河し、絙を以て敗船及び草木を約して河流を横絶し、一夕、冰は合いて浮梁の如し、遂に靈昌(吳昌×)郡を陥す。祿山の歩騎は散漫とし、人は其の數を知る莫し、過ぎる所殘滅す。張介然は陳留(現・河南省開封市祥符區)に至りて才に數日、祿山は至り、兵を授けて城に乗る。衆は恐懼し、守る能わず。庚寅(26)、太守の郭納は城を以て降る。祿山は北郭に入り、安慶宗の死を聞き、慟哭して曰く、
「我は何の罪ありて、而して我が子を殺すや！」

時に陳留の將士の降る者は道を夾みて萬人に近く、祿山は皆な之を殺し以て其の忿りを快くす。張介然を軍門に斬る。其の將の李庭望を以て節度使と為し、陳留を守らしむ。(12-258p)

■[遠征軍招集期日]壬辰(28)、上は制を下し親征せんと欲し、其の朔方、河西、隴右の兵城堡を留守する之外、皆な行營に赴いて、節度使をして自ら之を將たら令め、二十日を期して畢く集まらしむ。

■[顏真卿は山東平原で決起]初め、平原(漢は平原郡を置く。唐は德州と為す。天寶元年に復た改めて郡と為す。、山東省東臨道平原縣、現・德州市平原縣)太守の顏真卿は祿山が且に反せんとするを知り、霖雨に因り、城を完くし壕を浚い、丁壯を料り、倉廩を實す。祿山は其の書生なるを以て、之を易しとす。祿山の反するに及び、真卿に牒して平原、博平(博州、現・山東省聊城市)の兵七千人を以て河津を防がしむ、真卿は平原司兵の李平を遣わして間道して之を奏せしむ。上は始め祿山の反し、河北の郡縣は皆な風靡すると聞き、歎じて曰く、
「二十四郡、曾て一人の義士も無き邪！」

平至るに及び、大いに喜び、曰く、

「朕は顏真卿が何の状を作すを識らざるに、乃ち能く是くの如し！」

真卿は親客を使(續は遣)いし密に賊を購う牒を懷にし諸郡に詣らしめ、是に由りて諸郡は應じる者多し。真卿は、杲卿之從弟也。

【洛陽陥落】

■[封常清の連敗、洛陽陥落]安祿山は兵を引いて滎陽(現・河南省鄭州市滎陽市)に向い、太守の崔無詖は之を拒む。士卒の城に乗る者は、鼓角の聲を聞き、自ら墜ちること雨の如し。癸巳(29)、祿山は滎陽を陥し、無詖を殺し、其の將の武令珣を以て之を守らしむ。祿山の聲勢は益々張り、其の將の田承嗣、安忠志、張孝忠を以て前鋒と為す。封常清の募る所の兵は皆な白徒にして、未だ訓練を更ず、武牢に屯し以て賊を拒む。賊は鐵騎を以て之を蹂(踏みに)じる、官軍は大敗す。常清は餘衆を収めて、葵園(豐子谷の南)に戦い、又た敗れる。上東門内(洛陽の上春門。東都城の東面の三門、その北門)に戦い、又た敗れる。丁酉(33)、祿山は東京(洛陽)を陥し、賊は鼓噪して四門より入り、兵を縦ちて殺掠す。常清は都亭驛に戦い、又た敗れる。退きて宣仁門を守り、又た敗れる。乃ち苑西より牆を壊して西走す。

■[河南留守の撃滅]河南尹の達奚珣は祿山に降る。留守の李[心登]は御史中丞の盧奕に謂って曰く、
「吾が曹は國の重任を荷ない、知力敵せずと雖も、必ず之を死せん！」

奕は許諾す。[心登]は殘兵數百を収め、戦わんと欲し、皆な[心登]を棄てて潰え去る。[心登]は獨り府中に坐す。奕は先ず妻子を遣り印を懷にして間道して長安に走らせ、朝服して台中に坐し、左右は皆な散る。祿山は間廐に屯し、人をして[心登]、奕及び採訪判官の蔣清を執ら使め、皆な之を殺す。奕は祿山を罵り、其の罪を數め、賊黨を顧みて曰く、

「凡そ人為るは當に逆順を知るべし。我死すとも節を失わず、夫れ復た何をか恨まんや！」

[心登]は、文水(本は漢の大陵県、隋の文水県と為す。山西省冀寧道文水県、現・吕梁市文水県)の人なり。奕は、懷慎(開元の初めの賢相)之子。清は、欽緒(209 卷中宗景龍三年にあり)之子也。祿山は其の黨の張萬頃を以て河南尹と為す。

■[安祿山は陝を占領、関東は皆附く]封常清は餘衆を帥いて陝に至り、陝郡太守の竇廷芝は已に河東に奔り、吏民は皆な散ず。常清は高仙芝に謂って曰く、

「常清は連日血戦し、賊鋒は當たる可からず。且つ潼關に兵無く、若し賊が豕突して關に入れば、則ち長安は危うし矣。陝は守る可からず、如かず兵を引いて先ず潼關に據り以て之を拒むべし。」

仙芝は乃ち見兵を帥いて西に潼關に趣く。賊は尋いで至り、官軍は狼狽して走り、復た部伍無く、(12-259p) 土馬は相い騰踐し、死者は甚だ衆し。潼關に至り、守備を修完し、賊は至り、入るを得ず而して去る。祿山は其の將の崔乾祐をして陝に屯せ使め、臨汝、弘農(本は虢州虢郡。天寶元年に改名)、濟陰、濮陽(濮州)、雲中(雲州)の郡は皆な祿山に降る。是の時、朝廷は諸道に徵兵するも、皆な未だ至らず、關中は恐懼す。會々祿山は方に帝を稱せんと謀り、東京(洛陽)に留まりて進まず、故に朝廷は之が備えを為すを得、兵も亦た稍集まる。

■[安祿山は山東方面を略す]祿山は張通儒之弟の通晤を以て睢陽(現・河南省商丘市睢陽区)太守と為し、陳留長史の楊朝宗と胡騎千餘を將いて東に地を略せしめ、郡縣の官は多く風を望みて降り走り、惟だ東平(渾州、現・山東省泰安市東平県)太守の嗣吳王之祗(李琨の子。吳王李恪の孫。太宗の曾孫。信安郡王李禕の弟。兄に讓られて嗣吳王に封ぜられ、東平太守)、濟南(本は齊州齊郡。天寶元年に臨菑郡と改め、五載今の郡名に更む)太守の李隨は兵を起こして之を拒む。祗は、禕之弟也。郡縣之賊に従わざる者は、皆な吳王に倚りて名と為す。單父(古県、時に睢陽郡に属す)の尉賈贲は吏民を帥いて南に睢陽を撃ち、張通晤を斬る。李庭望は兵を引いて東に地を徇えんと欲し、之を聞き、敢えて進まず而して還る。庚子(36)、永王之璘を以て山南節度使と為し、江陵(荊州南郡)長史の源洧を之が副と為す。穎王之暉(王偏の字)を劍南節度使と為し、蜀郡(益州)長史の崔圓を之が副と為す。二王は皆な閣を出でず。洧は、光裕之子也。

■[皇帝は親征か讓位か]上は親征するを議し、辛丑(37)、太子に制して國を監(臨×)せしむ、宰相に謂って曰く、

「朕は在位すること五十載に垂々とし、憂勤に倦み、去秋已に位を太子に傳えんと欲す。水旱相い仍るに値し、餘災を以て子孫に遺すを欲せず、淹留し稍豊かなるを俟つ。意わず逆胡は横しまに發せんとは、朕は當に親征せんとす、且く之をして監國せ使めん。事平らぐ之日、朕は將に枕を高くして為す無からんとす矣。」

楊國忠は大いに懼れ、退きて韓、虢、秦の三夫人に謂って曰く、

「太子は素より吾が家の專横久しきを惡む矣、若し一旦天下を得れば、吾は姉妹と命を並せて旦暮れるに在らん矣！」

相い與に聚まりて哭し、三夫人をして貴妃に説き、土を銜みて(口に土塊を銜みて自ら死罪あるを明らかにす)命を上請わ使む。事は遂に寝ねる。

【唐朝の迎撃体制の乱れ】

■**[顔真卿を盟主とす]**顔真卿は勇士を召募し、旬日にして萬餘人に至り、諭すに舉兵して安祿山を討つを以てし、繼いで涕泣を以てし、士は皆な感憤す。祿山は其の黨の段子光をして李[心登]、盧奕、蔣清の首を繼し河北の諸郡を徇え使め、平原に至り、壬寅(38)、真卿は子光を執り、腰斬し以て徇う。三人の首を取り、續ぐに蒲身(蒲を以て軀幹の形を作る)を以てし、棺斂(納棺)して之を葬り、祭哭して吊を受ける。祿山は海運使(帝は辺功を事とするより青菜の粟を運し、海に浮かびて以て幽平の兵を給す、故に海運使を置く)の劉道玄を以て景城(本は滄州渤海郡、天寶に改名、現・河北省滄州市滄県西部)太守を攝し、清池(漢の浮陽県の地、開元十八年に改名)の尉の賈載、鹽山(漢の高城県の地、開皇十八年に県に鹽山有るを以て命名、現・河北省滄州市塩山県)の尉の河内の穆寧は共に道玄を斬り、其の甲仗五十餘船を得る。道玄の首を攜えて長史の李暉に謁し、暉は嚴莊の宗族を収め、悉く之を誅す。是の日、道玄の首を送りて平原に至り、真卿は載、寧及び清河(現・河北省邢台市清河縣)の尉の張澹を召して(12-260p)平原に詣りて事を計らしむ。饒陽太守の盧全誠は城に據りて代を受けず。河間(現・河北省滄州市河間市)の司法の李奐は祿山の署する所の長史の王懷忠を殺す。李隨は游奕將の訾嗣賢を遣わして河を濟わしめ、祿山の署する所の博平太守の馬冀を殺す。各々衆數千或は萬人有り、共に真卿を推して盟主と為し、軍事は皆な焉に稟く。祿山は張獻誠をして上谷(易州、現・河北省張家口市懷來縣)、博陵、常山、趙郡(趙州)、文安(冀州)五郡の團結の兵萬人を將いて饒陽を圍ま使む。

■**[高仙芝・封常清を処罰し殺す]**高仙芝之東征する也、監軍の邊令誠は數々事を以て之に幹(統は干)し、仙芝は多く従わず。令誠は入りて事を奏し、具に仙芝、常清の撓敗之狀を言い、且つ云う、「常清は賊を以て衆を揺かし、而して仙芝は陝の地數百里を棄て、又た軍士の糧賜を盜滅す。」上は大いに怒り、癸卯(39)、令誠を遣わして敕を繼し軍中に即きて仙芝及び常清を斬らしむ。初め、常清は既に敗れ、三たび遣使して表を奉りて賊の形勢を陳じ、上は皆な之を見ず。常清は乃ち自ら馳せて闕に詣る。渭南に至る。敕して其の官爵を削り、仙芝の軍に還り、白衣して自ら效さ令む。常清は遺表を草して曰く、

「臣死する之後、望むらくは陛下は此の賊を輕んぜざらんことを、臣の言を忘れる無かれ！」

時に朝議は皆な以為えらく、

「祿山は狂悖なり、日ならずして首を授けん」

と、故に常清の云うことは然りなり。令誠は潼關に至り、先ず常清を引き、敕を宣して之に示す。常清は表を以て令誠に附して之を上る。常清は既に死し、屍を蘧蔭(竹や葦で編んだ粗い敷物)に陳ず。仙芝は還り、聽事に至り、令誠は陌刀手百餘人を索めて自らに隨え、乃ち仙芝に謂って曰く、

「大夫も亦た恩命有り。」

仙芝は遽に下り、令誠は敕を宣す。仙芝は曰く、

「我は敵に遇い而して退く、死するは則ち宜なり矣。今上に天を戴き、下に地を履む、我を糧賜を盜滅すると謂うは則ち誣也。」

時に士卒は前に在り、皆な大呼して枉を稱し、其の聲は地を振わす。遂に之を斬り、將軍の李承光を以て其の衆を攝領せしむ。

■**[哥舒翰の二十萬、鬪志無し]**河西、隴右の節度使の哥舒翰は病廢して家に在り、上は其の威名あり、且つ素より祿山と協せざるに藉り、召見し、兵馬副元帥に拜し、兵八萬を將いて以て祿山を討たしむ。仍ほ天下に敕し四面より兵を進め、會して洛陽を攻めしむ。翰は病を以て固辭するも、上は許さず、田良丘を以て御史中丞と為し、行軍司馬に充て、起居郎の蕭昕を判官と為し、蕃將の火拔歸仁等は各々部落を將い

て以て従い、仙芝の舊卒を並せ、二十萬と號し、潼關に軍す。翰は病み、事を治まる能わず、悉く軍政を以て田良丘に委ねる。良丘は復た敢えて專決せず、王思禮をして騎を主り、李承光をして歩を主ら使む、二人は長を争い、統一する所無し。翰は法を用いること嚴に而して恤まず、士卒は皆な懈弛し、鬥志無し。

■[朔方節度使郭子儀の奮戦]安祿山の大同軍使の高秀巖は振武軍(单于都護府の域内に在り、西のかた朔方を去ること1700余里)を寇し、朔方節度使の郭子儀は撃ちて之を敗る、子儀は勝ちに乗りて靜邊軍(单于府の東北。王忠嗣が河東を鎮するとき築く所、雲中郡の西180里)を抜く。大同兵馬使の薛忠義は靜邊軍を寇し、子儀左兵馬使の李光弼、右兵馬使の高浚、左武鋒使の僕固懷恩、右武鋒使の渾釋之等をして逆撃せしめ、大いに之を破り、其の騎七千を坑(新唐書僕固懷恩傳には殺に作る)す。(12-261p)進みて雲中を圍み、別將の公孫瓊巖をして二千騎を將いて馬邑(朔州)を撃たしめ、之を抜き、東陘關(雁門關に東西陘關あり。時に河東太原は關を閉じ、以て高秀巖を拒ぐ)を開く。甲辰(40)、子儀に御史大夫を加える。懷恩は、哥濫拔延(198 卷太宗貞觀 20 年にあり)之曾孫也、世々金微都督(貞觀 20 年設置)と為る。釋之は、渾部の曾長、世々皋蘭(現・甘肅省蘭州市皋蘭県)都督と為る。

■[顏杲卿の巻き返し]顏杲卿は將に兵を起こさんとし、參軍の馮虔、前真定(常山郡を帯びる、現・石家莊市正定県)令の賈深、蒿城の尉の崔安石、郡人の翟萬德、内丘(漢の中丘県、隋は忠を諱み改めて内丘、鉅鹿郡に属す)丞の張通幽等は皆な其の謀に預る。又た人を遣わして太原尹の王承業に語り、密に與に相い應じる。會々顏真卿は平原より杲卿の甥の盧逖を遣わして潜に杲卿に告げしめ、兵を連らねて祿山の歸路を斷ち、以て其の西に入る之謀を緩めんと欲す。時に祿山は其の金吾將軍の高邈を遣わして幽州に詣りて徵兵し、未だ還らず、杲卿は祿山の命を以て李欽湊を召し、衆を帥いて郡(群×)に詣り犒賚(勞い物を賜る)を受け使む。丙午(42)、薄暮、欽湊は至り、杲卿は袁履謙、馮虔等をして酒食妓樂を攜えて往きて之を勞わしめ、其の黨を並せて皆な大いに酔い、乃ち欽湊の首を斷ち、其の甲兵を収め、盡く其の黨を縛し、明るる日、之を斬り、悉く井陘之衆を散ず。頃(しほら)く有りて、高邈は幽州より還り、且つ蒿城に至り、杲卿は馮虔をして往きて之を擒とせしめ、南境は又た白す、

「何千年は東京より來たり」

と、崔安石は崔萬德と馳せて醴泉驛(常山郡界にあり、南に趙郡に直る)に詣り千年を迎え、又た之を擒とし、同日郡下に致す。千年は杲卿に謂って曰く、

「今太守は力を王室に輸さんと欲し、既に其の始め善し、當に其の終わりを慎むべし。此の郡の應募は烏合にして、以て敵に臨むは難し、宜しく溝を深くし壘を高くして、與ら鋒を争う勿れ。朔方の軍の至るを俟ち、力を並せて齊しく進み、檄を趙、魏に傳え、燕、薊の要膂を斷てば、彼は則ち成擒と為らん矣(續は欠如)。今且く宜しく聲して云わん、『李光弼は步騎一萬を引いて井陘を出ず』、因りて人をして張獻誠に説きて、『足下の將いる所の團練之人多く、堅甲の利兵無し、以て山西(常山饒陽は井代を以て山西と為す。天かを合わせて之を言うときは、河南・河北は通じて之を山東と謂い、函谷關以西を山西と為す)の勁兵に當たり難し』と云わしめ、獻誠は必ず圍みを解いて遁げ去らん。此れ亦た一奇也。」

杲卿は悦び、其の策を用い、獻誠は果たして遁げ去り、其の團練兵は皆な潰える。杲卿は乃ち人をして饒陽城に入り、將士を慰勞せしめ、崔安石等に命じて諸郡に徇えて云う、

「大軍は已に井陘を下る、朝夕當に至らん、先ず河北の諸郡を平らげん。先に下る者は賞し、後に至る者は誅すべし！」

是に於いて河北の諸郡は響應し、凡そ十七郡は皆な朝廷に歸し、兵は合わせて二十餘萬。其の祿山に附く者は、惟だ范陽、盧龍(平州北平郡を改める、現・河北省秦皇島市盧龍県)、密雲(本は檀州安樂郡、天寶元年に改名、現・北京直轄市密雲区)、漁陽(薊州、現・北京直轄市密雲区)、汲(衛州)、鄴の六郡而して已む。

■[賈循は迷い、安祿山に殺される] 臯卿は又た密に人をして漁陽に入りて賈循を招か使め、邺城(漢の潁川郡の地)の人の馬燧は循に説いて曰く、

「祿山は恩に負きて悖逆し、洛陽を得ると雖も、終に夷滅に歸さん。公が若し諸將之命に従わざる者を誅し、(12-262p) 范陽を以て國に歸せば、其の根柢は傾かん、此れ不世之功也。」

循は之を然りとして、猶豫し時に發せず。別將の牛潤容は之を知り、以て祿山に告げ、祿山は其の黨の韓朝陽をして循を召さ使む。朝陽は漁陽に至り、循を引いて屏語し、壯士をして之を縊殺せ使め、其の族を滅す。別將の牛廷玠を以て范陽の軍事を知らしめる。史思明、李立節は蕃、漢歩騎萬人を將いて博陵、常山を撃つ。馬燧は亡げて西山(范陽郡の西山、南のかた上谷・中山の諸山に連なる)に入る。隱者(世捨人・隱遁者)の徐遇は之を匿し、免かるるを得る。

【顔臯卿らの河北の抵抗】

■[河北の顔臯卿の動きが安祿山を遅らす] 初め、祿山は自ら將に潼關を攻めんと欲し、新安に至り、河北の變有るを聞き而して還る。蔡希德は兵萬人を將いて河内(懷州)より北に常山を撃つ。

■ 戊申(44)、榮王の琬は薨じ、靖恭太子と贈諡す。

吐蕃 是の歲、吐蕃の贊普乞梨蘇籠獵贊は卒す、子の娑悉籠獵贊は立つ。

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上之上

玄宗至道大聖大明孝皇帝下之下至德元載(丙申, 756年)

(肅宗、諱は亨、玄宗の第三子。初めの名は嗣昇、開元15年名を浚と改め、23年に紹、寶元年に改名、天寶三載に亨)

(至德元載とはこの年七月に太子は位に靈武に即き、初めて至徳と開元す)

■[安祿山は大燕皇帝に即位] 春, 正月, 乙卯()51朔, 祿山は自ら大燕皇帝と稱し, 改元して聖武とし, 達奚珣を以て侍中と為し, 張通儒を中書令と為し, 高尚、嚴莊を中書侍郎と為す。

■[李隨が河南で抵抗] 李隨は睢陽に至り, 衆數萬有り。丙辰(52), 隨を以て河南節度使(この年初めて置く。汴州に治し、陳留・睢陽・靈昌・淮揚・汝陰・譙・濟陰・淄川・琅邪・彭城・臨淮・東海十三郡を領す)と為し, 前高要の尉の許遠(先に蜀に仕え、章仇兼瓊に忤い、高要の尉に貶される)を以て睢陽太守兼防禦使と為す。濮陽の客の尚衡は兵を起こして祿山を討ち, 郡人の王棲曜を以て衙前總管と為し, 攻めて濟陰を抜き, 祿山の將の邢超然を殺す。

■[王承業は顔臯卿の功を横取り] 顔臯卿(范陽の戸曹たり、安祿山は表して營田判官と為し、常山の太守を假す)は其の子の泉明、賈深、翟萬德をして李欽湊の首及び何千年、高邈を京師に獻ぜ使む。張通幽は泣いて請って曰く、

「通幽の兄(通儒)は賊に陥つ、乞う泉明と偕に行き、以て宗族を救わん。」

臯卿は哀れみ而して之を許す。太原に至り, 通幽は自ら王承業に托せんと欲し, 乃ち之に教えて泉明等を留め, 其の表を更め, 多く自ら功と為し, 臯卿を毀短し, 別に遣使して之を獻ぜしむ。臯卿は兵を起こして才に八日, 守備は未だ完たからず, 史思明、蔡希德は兵を引いて皆な城下に至る。臯卿は急を承業に告げる。承業は既に其の功を竊み, 城陥るを利とし, 遂に兵を擁して救わず。臯卿は晝夜拒ぎ戦い, 糧は盡き矢は竭く。壬戌(58), 城は陥る。賊は兵を縦ちて萬餘人を殺し, 臯卿及び袁履謙等を執りて洛陽に送る。王承業の使者は京師に至り, 玄宗は大いに喜び, 承業を羽林大將軍に拜し, 麾下の官爵を受ける者は百を

以て數える。顏杲卿を征して衛尉卿と為し、朝命未だ至らざるに、常山は已に陥ちる。

■[安祿山は顏杲卿を惨殺]杲卿は洛陽に至り、祿山は之を數めて曰く、

「汝は范陽の戸曹より、我は汝を奏して判官と為し、數年せずして超えて太守に至る、何ぞ汝に負き而して反する邪？」(12-263p)

杲卿は目を瞋^{いか}らして罵りて曰く、

「汝は本は營州の牧羊の羯奴なり、天子は汝を擢んで三道節度使と為し、恩幸は比無し、何ぞ汝に負き而して反するや？我は世々唐臣為り、祿位は皆な唐の有なり、汝が奏する所と為ると雖も、豈に汝に従いて反する邪！我は國の為に賊を討つ、汝を斬らざるを恨む、何ぞ反すと謂う也！臊羯狗、何ぞ速かに我を殺さざるや！」

祿山は大いに怒り、袁履謙等と並せて中橋(天津)之柱に縛し而して之を高す。杲卿、履謙が死するに比まで、罵ること口を虚しくせず。(高は元々關節の意味で、惨殺。手足を斬りても死ぬまで叫び続けた)顏氏一門は刀鋸(のこぎり)に死する者は三十餘人。

■[饒陽太守の盧全誠は独り従わず]史思明、李立節、蔡希德は既に常山に克ち、兵を引いて諸郡之従わざる者を撃ち、過ぎる所殘滅し、是に於いて鄴、廣平、巨鹿、趙、上谷、博陵、文安、魏、信都等の郡は復た賊の守と為る。饒陽太守の盧全誠は獨り従わず、思明等は之を圍む。河間の司法の李奐は七千人を將い、景城長史の李暉は其の子の祀を遣わして八千人を將いて之を救い、皆な思明の敗る所と為る。

■[李光弼を河東節度使]上は郭子儀に命じて雲中を圍むを罷め、朔方に還り、益々兵を發して進みて東京を取らしむ。良將一人を選びて兵を分けて先ず井陘に出で、河北を定めしむ。子儀は李光弼を薦し、癸亥(59)、光弼を以て河東節度使と為し、朔方の兵萬人を分けて之に與える。

■甲子(0)、哥舒翰に左僕射、同平章事を加え、餘は故の如し。

■[南陽節度使を置く]南陽節度使を置き、南陽太守の魯炆を以て之と為し、嶺南、黔中、襄陽の子弟五萬人を將いて葉(汝州に属す)北に屯し、以て安祿山に備える。炆は薛願を表して潁川(許州、現・河南省許昌市禹州市潁川)太守兼防禦使と為し、龐堅を副使と為す。願は、故の太子の瑛之妃の兄。堅は、玉(隋を去り、唐に帰し、將と為る)之玄孫也。乙丑(1)、安祿山は其の子の慶緒を遣わして潼關を寇し、哥舒翰は撃ちて之を卻く。

■己巳(5)、顏真卿に戸部侍郎兼本郡防禦使を加える。真卿は李暉を以て副と為す。

■二月、丙戌(22)、李光弼に魏郡太守、河北道採訪史を加える。

■[饒陽攻防戦、李光弼は史思明を撃退]史思明等は饒陽を圍むこと二十九日、下らず、李光弼は蕃、漢の歩騎萬餘人、太原の弩手三千人を將いて井陘に出ず。己亥(35)、常山に至り、常山の團練兵三千人は胡兵を殺し、安思義を執りて出で降る。光弼は思義に謂って曰く

「汝は自ら死に當たるを知るや否や？」

思義は應じず。光弼は曰く、

「汝は久しく陳行を更たり、吾が此の衆を視るに、思明に敵す可きか否か？今我が計を為すに當に如何すべきや？汝の策は取る可し、當に汝を殺さざるべし。」

思義は曰く

「大夫の士馬は遠來して疲弊す、猝に大敵に遇えば、恐らくは未だ當たり易からず。如かず軍を移して入城し、早く備御を為し、先ず勝負を料り、然る後に出兵すべし。胡騎は鋭と雖も、持重する能わず、苟くも利を獲らざれば、氣は沮み心は離れ、時に於いて乃ち圖る可し矣。思明は今饒陽に在り、此を去ること二百里ならず(真定より饒陽まで235里。思義は蓋し思明が營を下す處を指して之を言うなり)。昨暮、羽書は已に去り、計

るに其の先鋒は來晨必ず至り、(12-264p)而して大軍は之に繼ぐ、留意せざる可からざる也。」

光弼は悦び、其の縛を釋き、即ち軍を移して入城す。史思明は常山が守られざるを聞き、立ちどころに饒陽之圍みを解く。明くる日未だ旦ならざるに、先鋒は已に至り、思明等は之に繼ぎ、合わせて二萬餘騎、直ちに城下に抵る。光弼は歩卒五千を遣わして東門より出でて戦い、賊は門を守りて退かず。光弼は五百弩に命じ城上に於いて齊しく發して之を射しむ、賊は稍卻く。乃ち弩手千人を出だし分けて四隊と為し、其の矢をして發發相繼が使め、賊は當たる能わず、軍を道北に斂む。光弼は兵五千を出して檜城を道南に為り、呼沱水を夾み而して陳ず。賊は數々騎兵を以て搏戦し、光弼之兵は之を射、人馬の矢に中たる者は太半、乃ち退き、小憩して以て歩兵を俟つ。村民の有りにて告ぐ、

「賊の歩兵五千は饒陽より來たり、晝夜行くと百七十里、九門(常山郡に属す)の南逢壁に至り、憩息せんと度る。」

光弼は歩騎各々二千を遣わして、旗鼓を匿し、水に並んで潜行し、逢壁に至り、賊は方に飯せんとし、兵を縦ちて掩撃し、之を殺すこと遺す無し。思明は之を聞き、勢いを失い、退きて九門に入る。時に常山の九縣(真定・藁城・石邑・九門・行唐・井陘・平山・獲鹿・靈壽)、七は官軍に付き、惟だ九門、蒿城は賊の據る所と為る。光弼は裨將の張奉璋を遣わして兵五百を以て石邑(漢以来常山郡に属す。郡の西南。戍兵は与り多きは太原に路を通じる所以なり)に戍せしめ、餘は皆な三百人にて之を戍せしむ。

【雍丘攻防戦】

■**[賈賁の策略]**上は吳王の祗を以て靈昌太守、河南都知兵馬使と為す。賈賁は前みて雍丘(漢・晋に陳留郡に属し、北魏は陽夏郡に坐櫛、隋は梁郡に属す。唐は汴州に属す、現・河南省開封市杞県)に至り、衆二千有り。是より先譙郡(亳州、現・河南省周口市鹿邑県)太守の楊萬石は郡を以て安祿山に降り、真源の令の河東の張巡に逼り、長史と為し、西して賊を迎え使む。巡は真源(老子は苦県の人、祠の在る有り。唐は之を祖とす。故に県を改めて真源と曰う。現・河南省周口市鹿邑県)に至り、吏民を帥いて玄元皇帝廟に哭し、兵を起こして賊を討ち、吏民の従うを樂しむ者數千人。巡は精兵千人を選びて西に雍丘に至り、賈賁と合す。

■**[令狐潮は雍丘に賈賁を破る]**初め、雍丘令の令狐潮は縣を以て賊に降り、賊は以て將と為し、東に淮陽(陳州、現・河南省周口市淮陽区)の救兵を襄邑に撃た使め、之を破り、俘は百餘人、雍丘に拘し、將に之を殺さんとし、往きて李庭望を見る。淮陽の兵は遂に守者を殺し、潮は妻子を棄てて走り、故に賈賁は其の間を以て雍丘に入るを得る。庚子(36)、潮は賊の精兵を引いて雍丘を攻める。賁は出でて戦い、敗死す。張巡は力戦して賊を卻け、因りて賁の衆を兼ね領し、自ら吳王の先鋒使と稱す。

■**[張巡は令狐潮を撃退]**三月、乙卯、潮は復た賊將の李懷仙、楊朝宗、謝元同等四萬の餘衆と城下に奄至す。衆は懼れ、固志有るもの莫し。巡は曰く、

「賊兵は精銳なり、我を輕んじるの心有り。今其の不意に出でて之を撃てば、彼は必ず驚き潰えん。賊勢は小しく折れ、然る後に城は守る可き也。」

乃ち千人をして城に乗ら使める。自ら千人を帥い、數隊に分け、開門して突出す。巡は身ずから士卒に先んじ、直ちに賊陳を衝き、人馬は辟易し、賊は遂に退く。明くる日、復た進みて城を攻め、百砲(統は礮)を設けて城を環らす、樓堞皆な盡く。巡は城上に於いて木柵を立て以て之を拒む。(12-265p)賊は蟻附し而して登り、巡は蒿を束ねて脂を灌ぎ、焚き而して之を投じ、賊は上るを得ず。時に賊の隙を伺(同×)い、兵を出して之を撃ち、或は夜縋して營を斫る。六十餘日を積みて、大小三百餘戦し、甲を帶び而して食し、瘡を裹みて復た戦い、賊は遂に敗走す。巡は勝ちに乗りて之を追い、胡兵二千人を獲而して還り、軍聲は

大いに振う。

■[哥舒翰は安思順を陥れる]初め、戸部尚書の安思順は祿山の反謀を知り、因りて入朝して之を奏す。祿山の反するに及び、上は思順の先に奏するを以て、之を罪せざる也。哥舒翰は素より之と隙有り(前卷天寶十載)、人をして詐りて祿山が思順に遣る書を為ら使め、關門に於いて之を擒えて以て獻じ、且つ思順の七罪を數え、之を誅せんと請う。丙辰(52)、思順及び弟の太僕卿の元貞は皆な坐して死し、家屬は嶺外に徙す。楊國忠は救う能わず、是に由り始めて翰を畏れる。

■郭子儀は朔方に至り、益々精兵を選び、戊午(54)、進みて代に軍す。

■戊辰(4)、吳王の祗は謝元同を撃ち、之を走らせ、陳留太守、河南節度使に拜す。

■[李光弼を河北節度使]壬午(18)、河東節度使の李光弼を以て范陽長史、河北節度使と為し、顏真卿に河北採訪使を加える。真卿は張澹を以て支使と為す。

■[清河の若き李萼は顏真卿を説く]是より先、清河(現・河北省邢台市清河縣)の客の李萼は、年二十餘、郡人の為に師を真卿に乞いて曰く、

「公は首として大義を唱え、河北の諸郡は公を恃んで以て長城と為す。今清河は、公之西鄰なり、國家は平日江、淮、河南の錢帛を彼に聚め以て北軍を贍らす、之を『天下の北庫』と謂う。今布三百餘萬匹、帛八十餘萬匹、錢三十餘萬緡、糧三十餘萬斛有り。昔默啜を討つに(武后の時)、甲兵は皆な清河の庫に貯える、今五十餘萬事(一物は以て一事に給す可し。因りて之を事と謂う)、戸七萬、口十餘萬有り。竊に計るに財は以て平原之富を三にするに足り、兵は以て平原之強を倍にするに足る。公は誠に資するに士卒を以てし、撫し而して之を有し、二郡を以て腹心と為せば、則ち餘郡は四支の如く、使う所に隨わざる無し矣。」

真卿は曰く、

「平原の兵は新たに集まるも、尚ほ未だ訓練せず、自ら保つに恐らくは足らず、何の暇ありてか鄰りに及ばん!然りと雖も、借に若し子之請いを諾せば、則ち將に何を為さん乎?」

萼は曰く、

「清河は僕を遣わし命を公に衞ましむる者は、力足らず而して公之師を借り以て寇を嘗みるに非ざる也、亦た大賢之明義を觀んと欲する耳。今仰ぎて高意を瞻るに、未だ決辭定色有らず、僕は何ぞ敢えて遽に為す所を言わん哉!」

真卿は之を奇として、之に兵を與えんと欲す。衆は以為く、

「萼は年少にして輕虜なり、徒らに兵力を分ければ、必ず成す所無し」

と、真卿は已むを得ず之を辭す。萼は館に就き、復た書を為りて真卿を説き、以為く、

「清河は逆を去り順を效し、粟帛器械を奉じ以て軍を資く、公は乃ち納れず而して之を疑う。僕は轅を回す之後、清河は孤立する能わず、必ず繫托する所有り、將に公の西面之強敵と為り、公は能く悔やむ無からん乎?」

真卿は大いに驚き、遽に其の館に詣り、兵六千を以て之に借す。送りて境いに至り、手を執りて別れる。

真卿は問いて曰く、

「兵は已に行く矣、以て子之為す所を言う可き乎?」

萼は曰く、

「聞く朝廷は程千里を遣わして精兵十萬を將いて崞口(邯鄲縣の西、壺關の險)に出で賊を討つ、(12-266p)賊は險に據りて之を拒み、前むを得ず。今當に兵を引いて先ず魏郡を撃ち、祿山の署する所の太守の袁之泰を

執り、舊太守の**司馬垂**を納れ、西南の主人と為さ使めん。兵を分けて崞口を開き、千里之師を出し、因りて汲、鄴以北の幽陵(幽州)に至るまでの郡縣之未だ下らざる者を討つべし。平原、清河は諸同盟を帥い、兵十萬を合わせ、南に孟津を臨み、兵を分けて河に循い、要害を據守し、其の北走之路を制すべし。計るに官軍の東を討つ者は二十萬を下らず、河南の義兵の西に向う者も亦た十萬を減ぜず。公は但だ當に朝廷に表し壁を堅くして戦う勿れ、月餘を過ぎずして、賊は必ず内潰え相圖る之變有らん矣。」

真卿は曰く、

「善し！」

録事參軍の**李擇交**及び平原令の**范冬馥**に命じて其の兵を將い、清河の兵四千及び博平の兵千人に會して堂邑の西南に軍せしむ。**袁知泰**は其の將の**白嗣恭**等を遣わして二萬餘人を將いて來たりて逆え戦い、三郡の兵は力戦すること盡日、魏の兵は大いに敗れ、斬首は萬餘級、捕虜は千餘人、馬千匹を得、軍資は甚だ衆く、**知泰**は汲郡に奔る。遂に魏郡に克ち、軍聲は大いに振う。

■**[顏真卿は賀蘭進明に手柄を讓る]**時に北海(青州)太守の**賀蘭進明**も亦た兵を起し、**真卿**は書を以て之を召して力を並せんとし、**進明**は步騎五千を將いて渡河し、**真卿**は兵を陳ねて之を逆え、相い揖し、馬上に哭し、哀しみは行伍を動かす。**進明**は平原の城南に屯し、士馬を休養し、**真卿**は事毎に之を咨り、是に由りて軍權は稍**進明**に移り矣、**真卿**は以て嫌と為さず。**真卿**は堂邑(博平郡に属す、本は漢の清豊發干二県の地。隋の開皇十六年に置く)之功を以て**進明**に讓り、**進明**は其の狀を奏し、取捨は意に任す。敕して**進明**に河北招討使を加え、**擇交**、**冬馥**は微しく資級を進め、清河、博平の功有る者は皆な録せられず。**進明**は信都郡を攻め、之久しく、克たず。録事參軍の長安の**第五琦**は**進明**に厚く金帛を以て勇士を募るを勧め、遂に之に克つ。

■**[河南の李光弼と史思明の攻防]****李光弼**は**史思明**と相い守ること四十餘日、**思明**は常山の糧道を絶つ。城中草乏しく、馬は薦籍(むしろ)を食らう。**光弼**は車五百乘を以て石邑に之きて草を取らしめ、車を將いる者は皆な甲を衣、弩手千人之を衛り、方陳を為り而して行き、賊は奪う能わず。**蔡希德**は兵を引いて石邑を攻め、**張奉璋**は拒みて之を卻く。**光弼**は遣使して急を**郭子儀**に告げ、**子儀**は兵を引いて井陘より出で、夏、四月、壬辰(28)、常山に至り、**光弼**と、蕃、漢の步騎を合わせ共に十餘萬。甲午(30)、**子儀**、**光弼**は**史思明**等と九門の城南に戦い、**思明**は大敗す。中郎將の**渾瑊**は**李立節**を射、之を殺す。**瑊**は、**釋之**之子也。**思明**は餘衆を収めて趙郡に奔り、**蔡希德**は鉅鹿に奔る。**思明**は趙郡より博陵に如き、時に博陵は已に官軍に降り、**思明**は盡く郡官を殺す。河朔之民は賊の殘暴に苦しみ、所在(統は至所)に屯結し、多きは二萬人に至り、少き者は萬人、各々營を為し以て賊を拒む。**郭**、**李**の軍至るに及び、争いて出でて自ら效す。庚子(36)、趙郡を攻める。一日、城は降る。士卒の多くは虜掠す、**光弼**は城門に坐し、獲る所を収め、悉く之に歸し、民は大いに悦ぶ。**子儀**は四千人を生きて擒とし、皆な之を捨て、**祿山**の太守の**郭獻璆**を斬る。**光弼**は進みて博陵を圍み、十日、拔かず、(12-267p)兵を引いて恆陽(恆陽郡。其の地は恒山の陽に在るを以てなり。直隸省保定道曲陽県、現・保定市曲陽県)に還りて食に就く。

■**[潁川太守の來囓鐵]****楊國忠**は士之將と為る可き者を左拾遺の博平の**張鎬**及び**蕭昕**に問い、**鎬**、**昕**は左贊善大夫の**永壽**(武徳二年に新平を分けて永壽県を置き、邠州に属す。陝西省関中道永壽県の南、現・咸陽市永壽県)の**來瑱**を薦める。丙午(42)、**瑱**を以て潁川太守と為す。賊は屢々之を攻め、**瑱**は前後に賊を破ること甚だ衆く、本郡防禦使を加え、人は之を「來囓鐵」と謂う。

■**[北方の複雑な駆け引き]****安祿山**は平盧節度使の**呂知誨**をして安東副大都護(開元二年に安東都護府を平州に移す、天寶二年に遼西故郡城に徙す)の**馬靈察**(夫蒙靈察)を誘いて、之を殺さ使む。平盧游奕使の**武陟**(漢陽県の地、隋開皇

十六年に分けて武陟県を置く。時に河内郡に属す。河南省河北道武陟県、現・焦作市武陟県)の**劉客奴**、先鋒使の**董秦**及び安東將の**王玄志**は同じく謀り討ちて**知誨**を誅し、遣使し海を逾え**顔真卿**と相い聞し、范陽を取りて以て自ら效さんと請う。**真卿**は判官の**賈載**を遣わして糧及び戰士の衣を繼して之を助ける。**真卿**は時に惟だ一子の**顔**あり、才に十餘歳、**客奴**に詣りて質と為ら使む。朝廷は之を聞き、**客奴**を以て平盧節度使と為し、名の**正臣**を賜わる。**玄志**を安東副大都護と為し、**董秦**を平盧兵馬使と為す。

■南陽節度使の**魯炅**は柵を滎水之南に立て、**安祿山**の將の**武令珣**、**畢思琛**は之を攻める。

令和8年1月5日 翻訳開始 10945 文字

令和8年1月10日 翻訳終了 21620 文字